予言と怪異物語■黒沼 健

予言と怪異物語■黒沼 健

予言と怪異物語

昭和三十九年六月二十一日　印刷
昭和三十九年六月二十五日　発行

定価　三〇〇円

著者　黒沼　健

発行者　佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷・株式会社金羊社　製本・神田　加藤製本所
© Printed in Japan

目次

〝未来の扉口〟の物語……五
予言ものがたり……七
水晶凝視……三〇
変わり種予言者銘々伝……四五
神秘な草……五四
奇妙な実験記録……六〇
大統領暗殺秘話……七二
〝出現と消失〟の物語……七九
奇妙な降下物……八一
ある日、突然……九三
異次元に消える……一〇八

髑髏買いたし……一一九
〝戦火の蔭〟の物語……一二九
戦場の怪……一三一
奇怪な発光体……一三六
怪異物語……一五三
キッチナー元帥の死の謎……一五五
悲運の尼僧……一八四
科学の彼方の物語……二〇五
騒々しい幽霊……二〇七
不吉な使者……二一七
あとがき……二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

予言と怪異物語

〝未来の扉口〟の物語

予言ものがたり

1

「これから百年先の世の中は、いったいどんなふうになっているだろうか」

こんなことを考えるのは、先ず生活の安定した中年または初老の人たちだろう。それまでは生活のために苦闘をつづけて、頭にあるのは現在ばかりだった。とても百年先の将来のことなどを考える余裕はなかった。

ところが、生活が安定すると、とたんに人間の本能ともいうべき詮索欲が、百年先の未来の世界を知りたがるようになる。あるいは不可能なことだけに、余計欲求するようになるのかも知れない。

これが一方では、その百年先のことを自分の目で見ようという貪欲なのが、不老長寿の薬を探し出そうと企てるようになるのである。

しかし他方、ただそのときのことを知るだけでいい、という謙譲派は、予言者の言葉を聞くだけで満足する。それにしても、未来のことが、現在の世の中で判るというの

は、何という魅惑であろう。

創造主は、幸いにしてそのような能力をそなえた人を、この世の中におくって下さった。予言者である。予言というものは、誰にもできるというものではない。ある特定の人にだけ——とは今日の超心理学（パラサイコロジー）が説明しているところである。

一五〇〇年代の前半——というから三〇年か四〇年頃だろう——そのある日、所はイタリーのミラノ地方。一人の人品賤しからざる中年の紳士が、人通りの少ない街道を悄然と歩いていた。二度にわたるペストの大流行で、イタリー全土は疲弊のどん底にあった。その紳士も家族を、病魔に奪われ、悲痛の末、あてのない放浪の旅をつづけていたのかも知れない。

そのとき街道の反対の方から、数人の若い修道僧がやってきた。その中に、フェリックス・ペレティという貧農の息子がいた。

やがて修道僧たちは、中年の紳士に近づいた。すると、中年の紳士の脳裡に不思議な映像がうつったのである。

見るまにペレティの姿が消えて、代わりにあらわれたのは、同じ顔形の人の年老った姿だった。その人物は法王の法衣を身につけていた。中年の紳士は、はっとすると、その場に坐りこんだ。そしてペレティに向かって、いとも敬虔な礼拝を行なったのである。

同行の修道僧たちは、中年の紳士を怪訝な面持ちで見ていた。

「あなた方は妙に思われるかも知らんが」

と中年の紳士はいった。

「この方は、いつかは尊い身分になられる方です。その方に礼拝するのは、少しも可笑しくはないはずです」

しかし同行の修道僧たちには、その言葉の意味が理解できなかった。

「この紳士は、家族をペストで亡くして、亜がへんになっているのではないか。気の毒に——」

お互いに目顔でうなずき合いながら、その場を去って行った。

しかし、フェリックス・ペレティは、後年枢機卿となり、さらに一五八五年には法王シクストス五世となった。

街道に坐りこんで礼拝し、不思議なことをいった中年の紳士は、後に世紀の大予言者といわれたミシェル・ド・ノストラダムスその人であった。

彼は実に、ペレティと行き遭った瞬間に、未来の映像を脳裡にまざまざと見る〝予言〟の能力を恵まれたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

2

ノストラダムスはアンリ二世（一五一九―五九年）の晩年の不幸な運命を予見した。それによると王は決闘をして盲目になるというのである。そこで、

「決闘はくれぐれもなさいませんように。とりわけ四十一歳をお迎えになりましたら、ご注意が肝要でございます」

と進言した。ところが、たかが予言者の言葉ごときと王はこれを信じなかった。しかしノストラダムスの言葉は当たったのである。一五五九年、王が四十一歳のとき、ついに決闘をしなければならない羽目に陥り、その結果、頭部に負傷し、このためについに盲目となって、まもなく死んだ。すべてノストラダムスの予言の通りだった。

彼は女王のキャザリン・ド・メディチの寵愛をうけ、シャルル九世が王位に即くと、侍医に任命された。（ノストラダムスの本職は医師であった）

彼のことは、これまでにたびたび書いているから、ここでは重複を避けて、これ以上は割愛することにする。（「謎と怪奇物語」――〝七十世紀の大予言〟。「未来をのぞく話」――〝ノストラダムス余録〟）

世の中には、〝われこそは予言者なり〟と名乗りをあげている手合が、洋の東西、時の古今を問わず非常に多い。

毎年はじめに、これらの人は、その年の吉凶禍福の予言をする。たいていが〝吉〟より〝凶〟の場合が多いのだから、予言される側にとっては、迷惑であり、ときには戦々兢々の気分に陥る。

一九六二年一月、インドでヒンズー教の占星術師が、地球に大異変が起こることを予言した。

「二月二日から六日までの五日間に、金星、水星、木星、火星、土星が、天球の宝瓶宮に会合する。これは何千年に一度という希有の天文現象で、大きな災害が起こり、ひょっとすると地球の終焉となるかもしれない」

インド人は、だいたい〝占い〟や〝予言〟には弱いからたまらない。なかでもヒンズー教徒は家業をほったらかしにし、真冬の冷たいガンジス川で水浴して、毎日身の安泰を祈っていた。

ガンジス川に入らないまでも、その期間に旅行の予定のあった人びとは、鉄道や飛行機の予約を取り消して外出を控えた。みんな足が地につかなかった。ついには株式取引所も休業した。

そして二月六日を迎えて、その日が暮れた。夜に入って午後十一時五十九分五十九秒……全インドの人びとは、最も長かった一秒の経過するのを待った。

ついに午前零時、六日は無事に過ぎたのである。ほうぼうの寺院では平安を喜ぶ鐘が鳴らされた。町のあちこちからは、災害が訪れなかったという歓喜の声が、潮のように起こった。

面目丸潰れだったのは、ヒンズー教の占星術師たちだった。もっとも、このような厭な予言は当たってくれないほうがいい。

一九六三年一月、香港の葵という易者が、秋には世界に大動乱が起こるということを占っている。

また前年のインドの地球異変の予言のとき、シリアのある占星術師は、

「世界の終わりが今年くるというのは誤りで、それは二〇〇五年――いまから四十四年先のことである。それよりも来年の秋起こる第三次世界戦争のほうが心配である」

まことに気味の悪いことをいったのである。

3

この原稿を書いているのは、九月中旬すぎ、香港の易者や、シリアの占星術師のいう秋である。それに該当するかどうか知らないが、インドネシアではマレーシア連邦の発足にあたって何やら燻ぶっている。

それと今年のはじめには、もう一つ予言的な声明があった。これは予言というよりは、科学的な予見といったほうが当をえているかも知れない。というわけは、これは科学者の発言であるからだ。

「一万六千二百年の周期で太陽系を回っている彗星があるが、これが次に地球に接近するときには、地震、火山の爆発、気象の激変といったような大異変を惹き起こすだろう」

といったのである。発言者は、チリーのバルパライソ天文台長のフェラダ氏である。

この彗星は平秤座と太陽の間を、長い楕円を描いて回っている。天文台長の好意からか、接近の時期がいつであるかということは、いまのところまだいえないといっている。その確定した時期が計算できないので発表を控えているのか、それとも人心の動揺を防ぐため、判っているのだが発表しないのか。

私が、この予告に興味をもったのは、彗星の周期の一万六千二百年という数字である。

ベリコフスキーは、〝衝突する宇宙〟という奇妙な本を書いた。この本は、聖書の中の寓意的な話を、決して架空な寓意のものではないとして、これに客観的な裏付けをしたのである。

それによると、紀元前一四九五年、巨大な彗星が地球に接近した。エチオピア人とエジプト人は、この恐ろしい彗星に、王の名をとってティフォンとつけた。その外観は尾を曳いた真っ赤な火のようで、その上、コイルのように捩れている。さながら燃えたぎる火の玉が恐ろしい勢いで飛んでいるように見えた。

日がたつにつれ、彗星は一日一日と地球に接近してくる。はじめは天空の半ばに懸かっていたものが、ついには地平線の端から端へ、大きな弧を描くようになった。

「それは全身に血をあびた巨竜が、天空にのたうっているようだった」

と古記録は伝えている。月がでていても、彗星の赤い光りのほうが強かった。下界は終夜不気味な赤黒い光りに照らされていた。

朝になって太陽がでると、人びとは、はじめて救われたような気持ちになった。強い太陽の光りの前では、さすがにティフォンの赤い光りは勢いがなく、花火の残骸のような巨体を、真昼の月のように青空のなかに晒していたからである。

そして最後の日がきた。ついに彗星は地球と接触したのである。

五、六日前から気温は上昇していたが、その朝は特に暑かった。みんな暑さのために目を覚ました。

「これは、なんという暑さだ」

戸を開いて、朝の爽かな空気に触れようとしたが、面を撫でる外気は、むっとする熱気だった。

「まるで、パン焼きがまの中にいるみたいだ」

東の空が明るくなった。しかし、それは朝の太陽の光りではなかった。地平線の上は、血のように真っ赤に彩られていた。その赤さは、次第に範囲をひろめて、中空のほうへ昇って行く。

「最後の裁きの日が来たのではないか」

「おい、これを見ろ。血の雨だ」

空から赤い塵のようなものが降ってきた。それはすぐ降る量を増して、たちまちあたりを真っ赤な霧のようなもので包んだ。

4

記録によると、地球は三日間〝赤い世界〟となったとペリコフスキーは書いている。

彗星のガス状の尾の中にあった細かい赤い塵が地球の全表面を蔽ったのである。

海、湖、川の水はすべて血の色に染まった。聖書の〝出

エジプト記〃の、
「河にあるすべての水は変じて血となりぬ」
「エジプト全土に血ありき」
は、この凄まじさを物語るもので、〃紅海〃の名も、このときの海の色からつけられたのではないかといっている。

赤い塵の次には、隕石の雨が降り注いだ。地球が彗星の尾のなかへ深く突入したのである。人間はいうまでもなく驚いたが、山野に棲む動物や鳥類も驚いた。彼らは周章狼狽して、赤くない地方へ逃避を試みた。群をなした各種の動物が、山野を死物狂いで走って行った。

赤い空には、ところどころに黒い斑点があらわれて、右に左に動いていた。安住の地を求めて移動して行くいくつもの鳥類の大集団だった。

隕石の雨は、地上のあらゆるものを破壊した。〃野にあるすべての草を打ち、野にあるすべての樹を折り〃（〃エジプト記〃）地上の家という家を毀した。むろん人間も傷ついた。なかには大きな石が当たって死んだものもあった。

幸いに彗星の頭部と地球との衝突は免れたが、地球のそばをかすめて通過したとき、地球との間に大放電が起こった。これは水爆がいくつか同時に爆発したような素晴しい高エネルギーのものだった。

そのため地球の自転が乱れ、自転の角速度が変化して、地球の表面には物凄い強風が吹きまくった。この強風は七日間つづいた。強風は彗星が吹きつけるガス、塵、灰のためにも起こった。それらの塵や灰は地球の表面を厚く被った。〃赤い世界〃の次にこんどは〃暗黒の世界〃が訪れたのである。

風がおさまって世界は、はじめて暗黒から解放された。しかし、そのとき地球上には、大変なことが起こっていた。

海底には水がなく、海水は逐いやられて、壁のように盛りあがっていた。ある記録によると、〃海水は二五〇〇キロの高さに盛りあがって、地球上の全住民から見えた〃とベリコフスキーは書いている。

聖書の〃出エジプト記〃によると、モーゼが率いるイスラエル人は、紅海のほとりまできて絶体絶命の窮地に陥った。前方は海、そして背後からはエジプトの軍隊が追ってくる。イスラエル人たちの面には生色はなかった。モーゼは地に跪いて神に祈った。

「神よ、私たちをお護り下さるのでしたら、ここから逃れる術をお授け下さいまし」

瞬間、空に電光が閃いた。物凄い火花が散り、地は轟音とともに大きく揺れた。そして、さながら奇蹟のようなこ

とが起こった。海水は割れて両側に高く盛りあがり、その間に一条の水のない海底があらわれた。

「おお、道だ」

「道ができた」

人びとは狂喜して、その海底の道を通って対岸に辿りついた。エジプトの軍隊が岸辺についたのは、丁度そのときだった。指揮官の号令で彼らも海底の道を追ってきた。だが、その半ばまできたとき、両側に盛りあがった海水の壁は、双方から崩れるように落ちてきてエジプトの軍隊をひと呑みにした。

映画〝十戒〟の特殊撮影のクライマックスの場面である。

5

ティフォン彗星と地球の接触は、およそ紀元前千五百年頃のことであって、チリーのバルパライソ天文台長のフェラダ氏がいう、一万六千二百年の周期で太陽系を回っている彗星との接触ではない。

しかし、地球と彗星が至近距離で接触すると、右に書いたような凄まじい現象が地球に起こることになるのである。

フェラダ氏の彗星が周期一万六千二百年で、近く地球に接近するというと、いまから一万六千二百年の昔にも、地球に接近していたのである。

ところで、一万五千年前というから、一万六千二百年に比べると、千二百年の隔りがあるが、この頃、地球に一大異変があった。

それは、太平洋上にあった大陸〝ムー〟の海底陥没である。

〝ムー〟大陸の研究家であるジェームズ・チャーチワードの説によると、地球の内部を走る大ガス帯のガスが、たまたま〝ムー〟大陸の地底に充満し、これがはけ口を地表に求めて大爆発を起こし、それに伴った大地震で大陸は海底へ崩壊したことになっている。

だが、私は、前から大陸の海底陥没は、そのとき地球に接近した彗星との接触によるものではないかと考えていた。

ティフォン彗星の例でも判るように、大彗星との接触は、うっかりすると地球自体の壊滅をすら招くようなことになるのである。

あるいは、右の千二百年は計算の誤差とすると、フェラダ彗星は、すでに地球にたいしては前科一犯の犯罪者ということになる。この彗星が〝ムー〟を海底へ沈めたとなる

と、こんどの接近では、どんなあくどい悪戯をするのか、少なからず気がかりでもある。

〃地球の終焉〃――〃世界の終わり〃の予言は、昔から多くの予言者がやっている。ノストラダムスもまた人後に落ちない一人で、次のように予言している。

〃大きな数の七の年に
神前の犠牲が動きだす
この世の終末が近づいたのである
そして死者は墓からでてくる〃

〃大きな数の七の年〃とは、予言詩の解説者によると、紀元七〇〇〇年ごろであるという。ノストラダムスは、この年はまた〃最後の裁きの年〃でもあるというのである。

地球の終末が真実紀元七〇〇〇年に訪れるかどうか、われわれには判らない。これはあまりにも宏大無辺、底無しの悠久の予言である。

しかし、普通の在り来たりの予言は、もっとわれわれの生活に即している。そして、間もなく近づく運命の日を、何とか近づかなくする術はないものかと、犠牲をささげる風習が生まれた――とアルスン・スミスは説いている。

イギリスでドゥルイド教の僧侶や予言者が、囚人を巨大な〃太陽の車〃の中で犠牲にしたこと、インカで処女を犠牲に供したことは、いずれも地球が遭遇する最終的な運命の緩和策が、そもそもの始めであった。

ところが、いまだに繰り返される〃地球の終わり〃の予言にたいして、相変わらず犠牲の方法が行なわれていると聞いたら、読者は恐らく慄然とするに違いない。だが、それは紛れもない事実であった。

6

一九二六年、スペインのサンタンデルに住むある家族は、折りから流布されていた〃地球の終末〃が無事にすむようにと、自分の赤ん坊（女児）を犠牲に供した。二十世紀の、僅か四十年ほど前の事件だから、ただただ驚く他はない。

一九四八年といったら今から十数年前のことである。ドイツのオルデンブルクの近くに、バルト海地方からの避難民の家族が住んでいた。中年の夫婦に、五歳と三歳の男の子の、つつましやかな生活だった。

ある日、隣家のパン屋の内儀さんが、血相を変えて、カマ場へ入ってきた。

「お前さん、何だか変なんだよ」

と声もそぞろである。

「変？　何が変なんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.